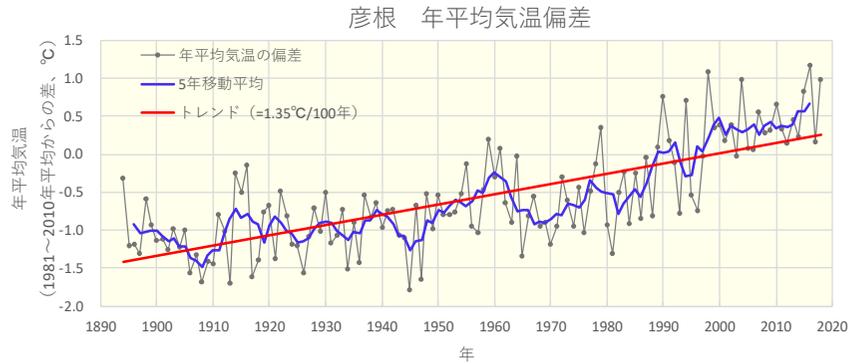


# 滋賀県の気候変動とその影響について (令和元年度版)

# 滋賀県のこれまでの気候情報

## 気温

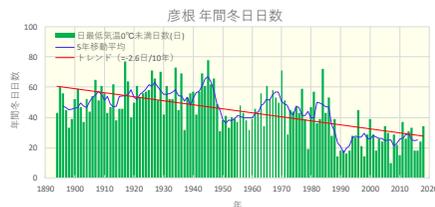
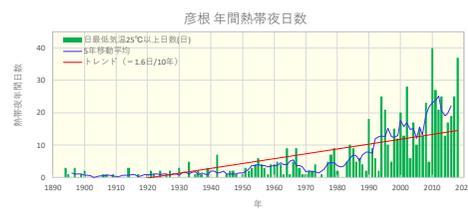
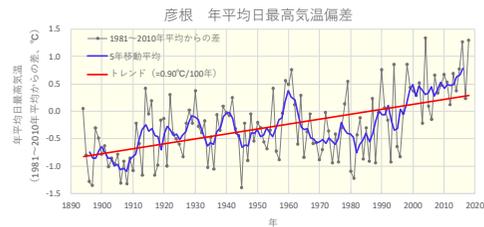
彦根の年平均気温は100年あたり1.35℃の割合で上昇傾向が見られる。



彦根における年平均気温の変化（1894～2018年）

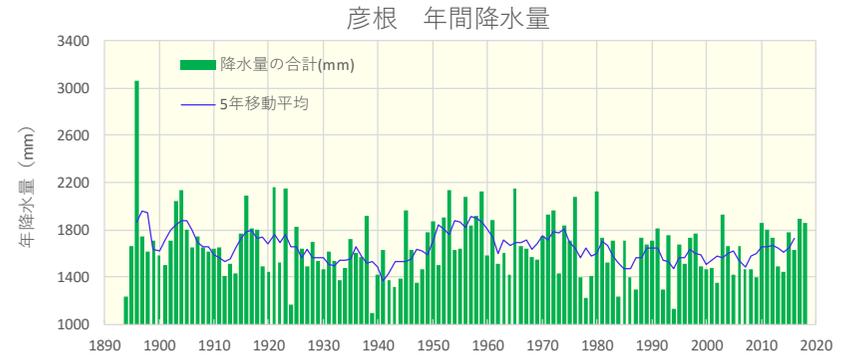
### その他の主な気温の傾向

- 年平均最高気温・・・100年あたり**0.90℃**の上昇
- 年平均最低気温・・・100年あたり**1.87℃**の上昇
- 熱帯夜(日最低気温が25℃以上の日)・・・10年あたり**1.6日**増加
- 冬日(日最低気温が0℃未満の日)・・・10年あたり**2.6日**減少



## 降水量等

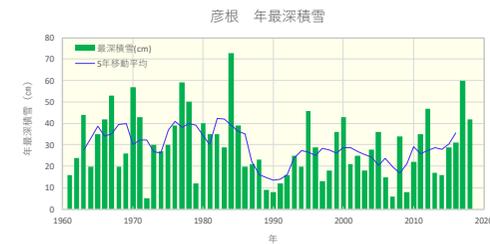
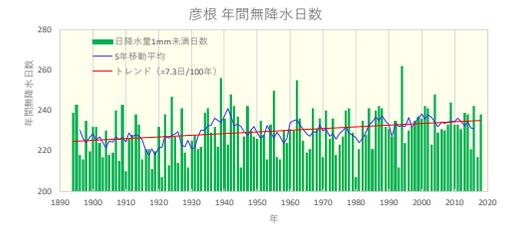
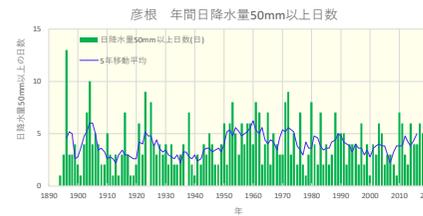
彦根の年降水量には変化傾向は見られない。



彦根における年降水量の変化（1894～2018年）

### その他の主な降水等の傾向

- 大雨の発生日数・・・変化傾向は見られない
- 無降水日数(日降水量1.0mm未満)・・・100年あたり**7.3日**増加
- 年最深積雪・・・変化傾向は見られない

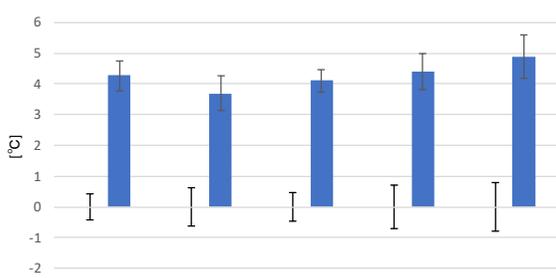


# 滋賀県の気候の将来予測情報（気象庁地球温暖化予測情報第9巻（RCP8.5））

## 気温

滋賀県の年平均気温は、21世紀末で約**4.3℃の上昇**が予測される。季節別では、冬の気温上昇が約4.9℃程度と顕著である。最高・最低気温でも上昇の傾向が見られるが、**最低気温の上昇**が顕著である。

平均気温の将来変化(℃)



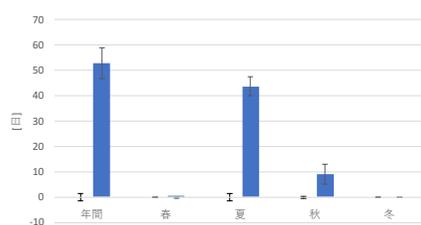
【参考】彦根の年平均気温の平年値：14.7℃

	年	春	夏	秋	冬
21世紀末	4.3	3.7	4.1	4.4	4.9

### その他の主な気温の将来予測

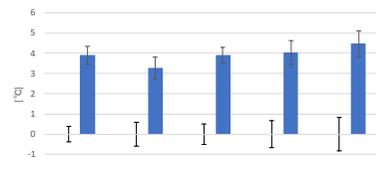
- **真夏日** (日最高気温が30℃以上の日)
  - 21世紀末には**50日以上**の増加
- **熱帯夜** (日最低気温が25℃以上の日)
  - 21世紀末には**50日以上**の増加
- **冬日** (日最低気温が0℃未満の日)
  - 21世紀末には**40日以上**の減少

熱帯夜日数の将来変化(日)

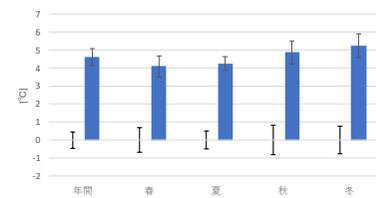


	年	春	夏	秋	冬
21世紀末	52.8	0.0	43.7	9.1	0.0

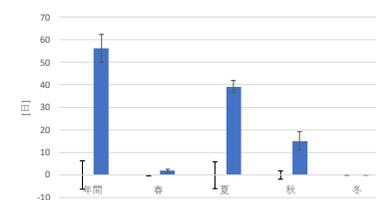
最高気温の将来変化(℃)



最低気温の将来変化(℃)

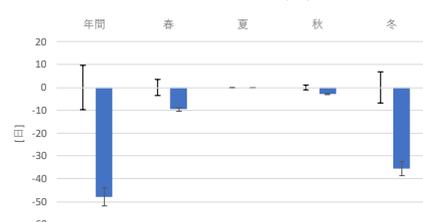


真夏日日数の将来変化(日)



	年	春	夏	秋	冬
21世紀末	56.2	2.0	39.2	15.0	0.0

冬日日数の将来変化(日)

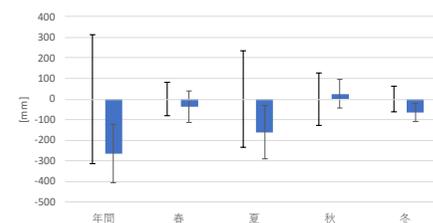


	年	春	夏	秋	冬
21世紀末	-47.8	-9.6	0.0	-2.9	-35.3

## 降水量等

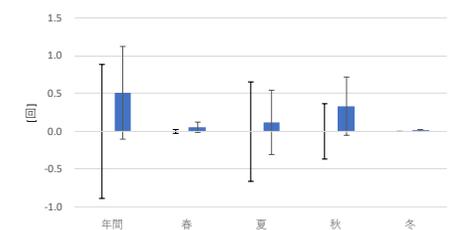
年降水量は全国的には有意に増加しているとの報告があるが、本調査では滋賀県の年降水量は減少傾向が見られており、将来の傾向は更なる検討が必要である。一方で、短時間強雨の発生回数は**増加傾向**が予測されている。

降水量の将来変化(mm)



	年	春	夏	秋	冬
21世紀末	-265	-35	-162	25	-64

時間降水量30mm以上発生回数の将来変化(回)

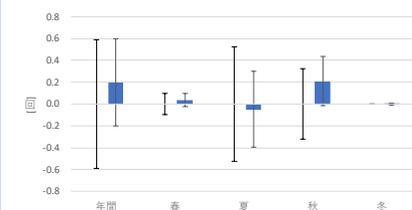


	年	春	夏	秋	冬
21世紀末	-265	-35	-162	25	-64

### その他の主な降水等の将来予測

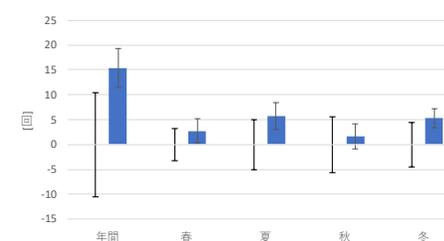
- **大雨発生日数** (日100mm以上)
  - 秋を中心に増加の可能性
- **年間無降水日**
  - 年間を通して増加の可能性
- **年最深積雪**
  - 年間で**40cmを超える減少**の可能性

日降水量100mm以上発生回数の将来変化(回)



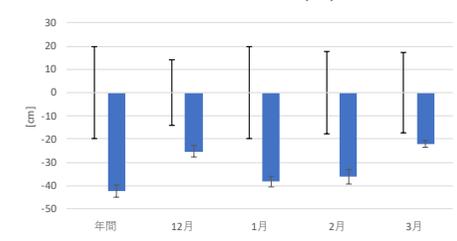
	年	春	夏	秋	冬
21世紀末	0.2	0.0	-0.1	0.2	0.0

無降水日数の将来変化(日)



	年	春	夏	秋	冬
21世紀末	15.4	2.8	5.7	1.7	5.2

最深積雪の将来変化(cm)



	年	12月	1月	2月	3月
21世紀末	-42	-25	-38	-36	-22

## (1) 気候変動影響情報の収集

### ・意見交換

県民の方 2回(県北部(10月)・南部(1月))

農業者(稲、麦類、大豆の栽培に従事)、

琵琶湖の漁業者(県内4漁協)、

林業者(県内3森林組合)、

企業(製造業 約20社)の担当者 各1回

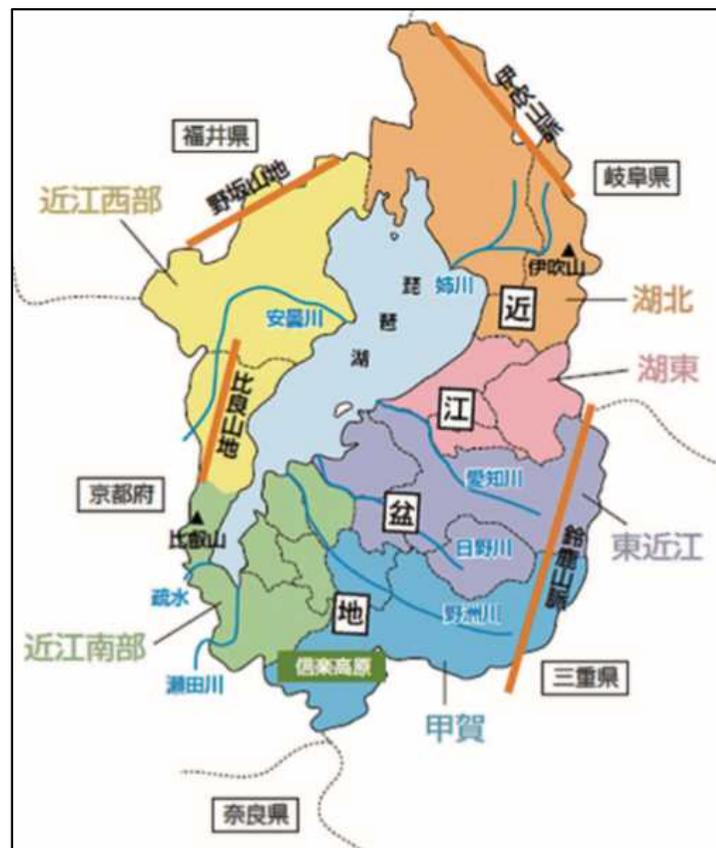
### ・情報提供票による意見収集

## (2) 収集した情報の確認

## (3) 公表、普及啓発

### ・シンポジウムの開催

### ・啓発動画の作成



# (1) 気候変動情報の収集

県民との意見交換で出された意見 【第1回@守山市】（令和元年10月11日）

◎ 出席者 28名

◎ 地域の特徴 京阪神への通勤・通学圏として県内では都市化が進行。県北部と比較すると、住宅地や工業団地が多く人口も多い。農家は兼業農家が中心。気候は冬の降雪が少なく太平洋側の気候区に位置する。

◎ 主な意見

## <農林水産業>

- 野菜の不作、高騰が発生した。
- 田植えの時期が変わってきた。刈り取りが早期化し8月末になった。
- 昔は多肥料、多収穫であったが、肥料を多くすると未熟粒が発生してしまうので、少収量でもおいしいお米を求めるようになった。

## <生活>

- 木之本（滋賀県北部）でもスタッドレスタイヤを使わなくなった
- 雪が減った
- クーラーをつけっぱなしにするようになった
- 冬に氷がはらなくなった
- 極端な気象が多くなった（竜巻、大雨の増加。その一方で夕立が減った。）

## <自然災害>

- 滋賀県内でも災害が発生しないか不安。
- 野洲川（日本の大河川で最も勾配がきつい川の一つ）が氾濫しないか心配

# (1) 気候変動情報の収集

県民との意見交換で出された意見 【第1回@守山市】（令和元年10月11日）

## <自然生態系>

- ゴーヤやあさがおの咲く時期が変わってきた
- 南方系のキノコが早くから遅くまで咲いている（ヒラタケなど北方系のキノコの減、ウスヒラタケなどの南方系キノコの減。食生活の中では順応していけるが生物多様性としては課題）
- キノコの種類が減っている
- 雑草の種類が変わってきた

## <健康>

- 熱帯性の病気が心配。
- 6から8月は熱中症が心配で子供がなかなか外のイベントに参加してくれない。子供の遊び方が変化し、里山も変化（危機的状況に変化）してきている。

## 【結果】

- 雪の減少という意見が最も多く、雨や気温など気候の変化を実感しているという意見が多かった。
- その次に、身の回りの自然環境（動植物）の変化に関する意見が多かった。
- 気候変動への今後の不安として、自然災害、熱中症の増加という意見が多かった。
- 一方で、獣害の増加や風倒木の発生に関しては、里山との関わり方の希薄化が顕著であり、今後、気候変動被害を増大させかねないのではないかという意見もあった。

# (1) 気候変動情報の収集

## 県民との意見交換で出された意見 【第2回@長浜市】(令和2年1月18日)

◎ 出席者 19名

◎ 地域の特徴 関西文化圏の東端で北陸・東海地域との緩衝地帯。南部と比較し宅地開発や工場進出が遅れているが、歴史的文化的景観や豊かな自然が残る。琵琶湖淀川流域の最北端であり、最も水質が良好な地域。気候は北陸・山陰型の日本海気候区に位置する。福井県境の長浜市旧余呉町は日本最南端の特別豪雪地帯。

◎ 主な意見

### <農林水産業>

- ・山のブナ等が大規模に倒れている。

### <生活>

- ・雪が減って生活が楽になった（屋根の雪下ろし、買い物、通勤・通学）
- ・除雪費用が掛からなくなった（市役所・民間企業）
- ・灯油の使用量が減った
- ・霜柱が見られなくなった
- ・今後雪景色が無くなるのではないか
- ・野菜やビールを冷蔵庫に入れるようになった（今までは室温や雪の下に保存）
- ・購入する衣服、靴の種類が変わった
- ・クーラーの使用が増えた
- ・気温差が大きい

### <観光>

- ・スキー場がオープンできない

# (1) 気候変動情報の収集

県民との意見交換で出された意見 【第2回@長浜市】 (令和2年1月18日)

## <自然災害>

- 姉川の近くで洪水が心配。  
(2017年台風5号では姉川が氾濫し床上、床下浸水が発生。)
- 米原市で竜巻が発生した(2018年)。

## <自然生態系>

- 野生獣の出没が多くなった。庭に来るチョウで最も多いのがツマグロヒョウモン。
- ニイニイゼミが減ってクマゼミが増えた。紅葉が綺麗でなくなった。



2018年6月29日 産経フォト記事 (写真: 米原市内)



2017年8月8日 朝日新聞デジタル記事 (写真: 長浜市姉川付近)

## 【結果】

- 雪の減少や暖冬という意見が最も多かったが、雪の減少を生活しやすくなったと受け止めている意見も多かったのが特徴。
- 気候変動への今後の不安としては、自然災害の発生という意見が多かった。熱中症への不安に関しては、地域の高齢化も相まってという意見があった。

# (1) 気候変動情報の収集

農林水産業従事者および企業との意見交換で出された意見

## (1) 森林・林業

### <林業>

- 雪に覆われている期間が短くなった。冬場に作業できる期間が長くなった。一方で、木材供給が通年で可能になったために、価格は下落した印象がある。
- 夏の作業環境が過酷であり熱中症が心配。
- 降雪量の減少により、水の確保が難しくなった。

### <獣害>

- ニホンジカの生息数が増加し、生態系や林業、生活環境に影響を与えてきている。その要因の1つとして雪が減り越冬できる個体が増加したこと等が考えられている。

### <植生>

- 過去にはナラ枯れが発生していたが、今は収束している。
- アカガシの北限、ユキツバキが自生できる南限と言われているが、植生が変化している印象はない。

### <今後の不安>

- 手つかずで管理が行き届かなくなった森林が増えたことにより、気候変動の影響を余計に受けやすくなってきている印象があり、風倒木による被害など思わぬリスクを招く可能性がある。

# (1) 気候変動情報の収集

農林水産業従事者および企業との意見交換で出された意見

## (2) 琵琶湖・漁業

### <水温>

- 30年ほど前の琵琶湖では夏場に表層水温が30℃を超えることは無かった。アユは梅雨が明けて水温が上がってきた頃から成長が止まってしまう印象がある。
- 琵琶湖の水温上昇はできる限り防ぎたいが、ホンモロコやニゴロブナ等の温水性の魚にはプラスに働いてもおかしくないと思う。一方、アユなどの冷水性の魚もいるので、その点も留意しながら対策を進めて欲しい。

### <降雨>

- 雨の降る時と降らない時との差が大きくなっている印象があり、遡上性の魚は大きな被害を受けているように感じる。水温上昇や雨の降り方の変化、栄養塩の変化により生態系に変化が現れている印象。
- 琵琶湖は大雨の災害リスクを軽減してくれており、人への影響を軽減してくれていると思うが、魚にとっては大きな水位変動は産卵場などに影響を与えているのではないかと思う。
- 台風21号でエリ（琵琶湖の漁具）が被害を受け廃業した漁師もいる。流れてきた流木が湖底の漁場に覆いかぶさりシジミ漁などに被害が発生した。

### <河川・集水域>

- 近年、琵琶湖に流入する河川は、水量が多いか少ないかの二極である。川の水を琵琶湖に安定的に流すための水源涵養、間伐による保水力の確保が必要ではないか。

# (1) 気候変動情報の収集

農林水産業従事者および企業との意見交換で出された意見

## (2) 琵琶湖・漁業

### <全体>

- 赤潮が初めて発生した頃の方が魚は多かった。その後、下水道の整備や排水規制等により水質改善が進み、見た目には本当にきれいな水になった。一方で、プランクトン種の変化や特定外来生物の侵入など、気候変動も含めた様々な環境の変化により、生態系バランスが崩れている印象がある。

### <今後の不安>

- 猛暑による熱中症は心配。高齢化が進んでおり多くの漁師が70歳代。今後も気温は上がっていくので心配。
- 農作物であれば、品種改良などの「適応策」がとれるが、琵琶湖の魚の場合は、人が対策によって魚が適応できる水環境を維持していくほかは無いと思う。
- 琵琶湖は歴史のある湖であり固有種の生息を維持して欲しいと思う。湖魚料理は故郷の味であり、将来につないでいって欲しいと思っている。



琵琶湖の固有種



琵琶湖の漁法の1つ（エリ）

# (1) 気候変動情報の収集

農林水産業従事者および企業との意見交換で出された意見

## (3) 農業

### <稲作>

- どの農家も気候変動の顕在化を感じており、天候を見極めながら稲作を進めることが定着してきている。各農家の努力により1等米比率は、統計上減少傾向にあるが、一定の歯止めがかけられていると考えている。

### <麦類>

- 暖冬で育ちすぎた麦が、一気に冷え込むことで、低温凍霜害を受ける可能性が高くなっており、品種改良や施肥の方法（栽培方法）を見極めていかなければならない。
- 短期的なより精度の高い気候予測。1か月先の精度の高い予測が出されるだけで栽培対策ができるので、農業のしやすさは大きく変わる。

### <病害虫>

- 天候の変化が極端になってきているので、農作物の病害虫の発生様相も影響を受け、防除要否の判断が難しくなっている。

### <農業用水>

- 冬の降雪が少ないので春先から梅雨前にかけて用水不足になりがち。適応策として用水確保の対策や効率良く使用できる仕組や施設の整備を進めて欲しい。
- 農業用水施設は老朽化が進んだものもあり、大型の台風等が接近すると、今後被害が大きくなる可能性がある。

# (1) 気候変動情報の収集

農林水産業従事者および企業との意見交換で出された意見

## (3) 農業

### <果樹>

- 着色不良による価格の低下、病害虫の発生様相の変化によるリスク増大等の影響は生じていると聞いている。

### <今後の不安>

- 農業の適応策を考える上では、まず、今育てている作物を守るために栽培技術（施肥、病害虫対策、水管理等）を確立する、それでも対応できない場合は、新たな品種の開発、作物転換となっている。その場合も、5年後、10年後というスパンでのより精度の高い予測が必要である。
- 例えば、将来、気象面から見ると、滋賀県もミカンの栽培適地になるという可能性があるが、産地として確立するには相応の生産量が必要になり、いつ作物転換に踏み出すべきなのかというのは判断が難しい。
- 近江米は、みずかがみ、コシヒカリ、キヌヒカリの3品種で、8月20日から9月5日頃に一斉に刈り取りが終わるが、作業環境が厳しく、農業者の熱中症が気になり。

# (1) 気候変動情報の収集

農林水産業従事者および企業との意見交換で出された意見

## (4) 企業

＜適応策に関して＞

- 災害により貯蔵している油や化学物質が流れ出ることが、社会的影響も大きく不安。災害マップ等も公表されているが、河川堤防のどの場所が決壊した場合の想定なのか等、予測の前提となる条件も併せて示してほしい。
- 情報が伝わらないのが一番困るので、国や県や市町などの行政、企業、地域の間できちんと情報の伝わる体制を整備してほしい。
- 企業はもともと地震や台風対策の一環で「適応策」を講じている。追加の情報として、工場の近くで大雨が降った場合どうなるか、大雨の時に土のうをいつ積みれば良いかという情報を出してもらえるとありがたい。

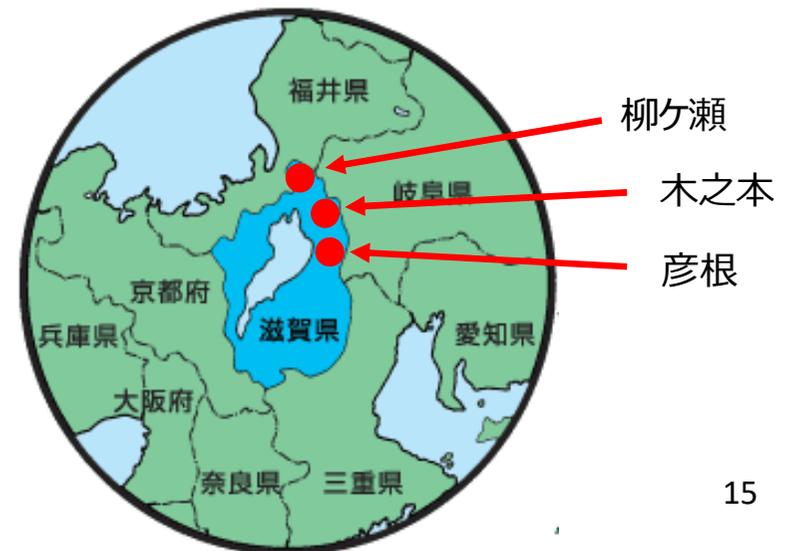
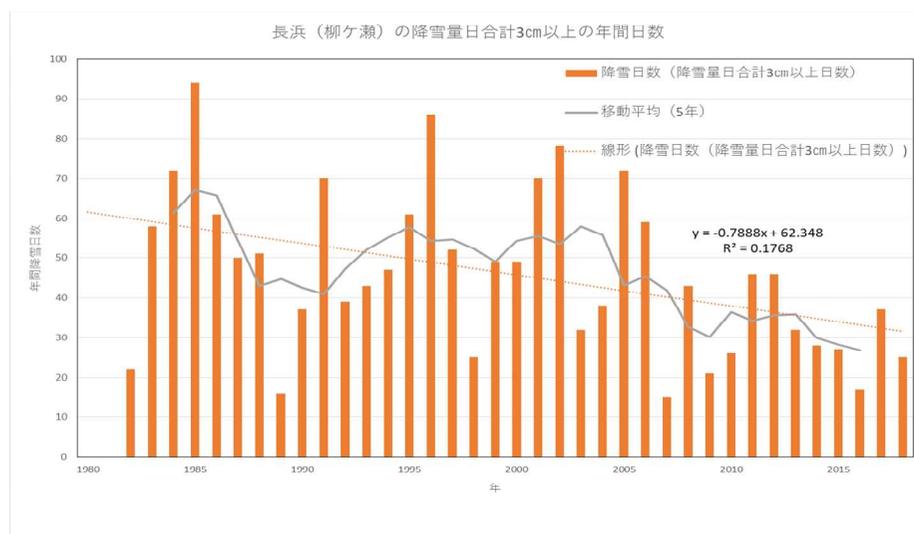
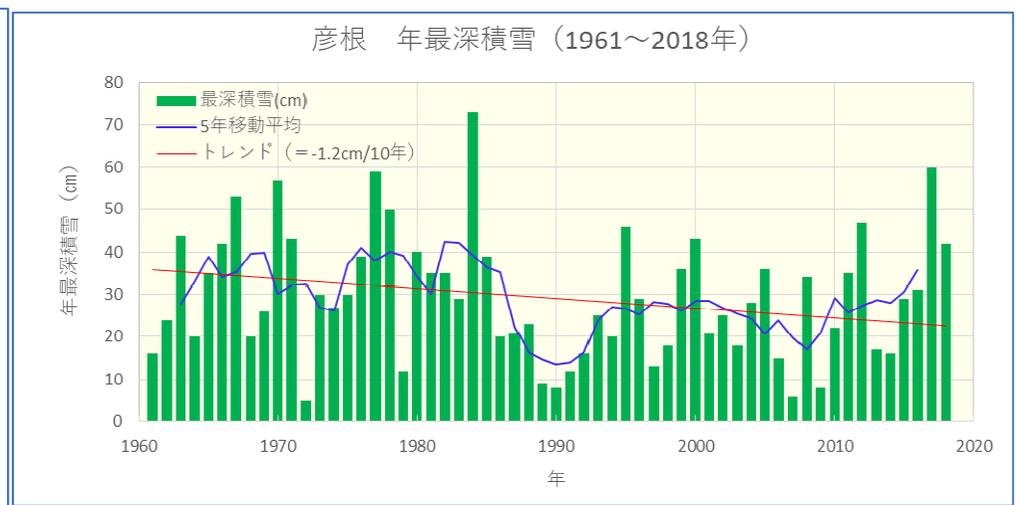
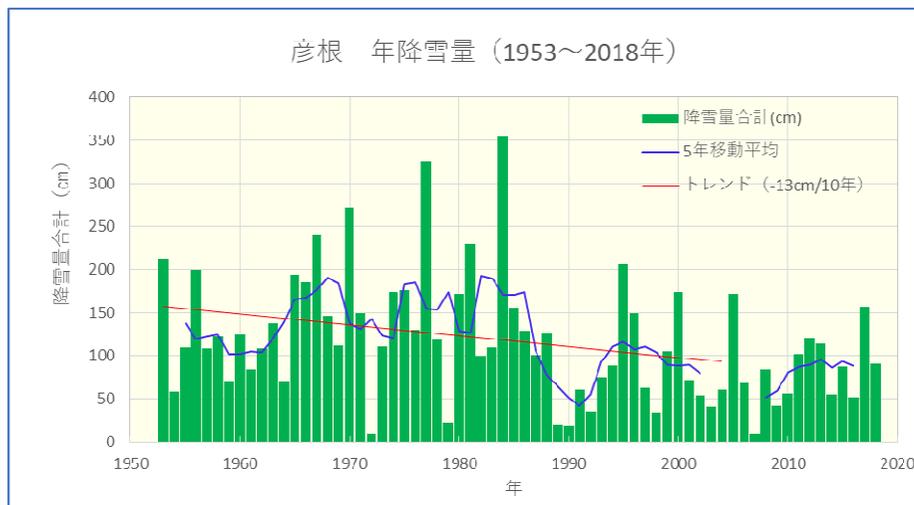
### 【結果（農林水産業従事者との意見交換）】

- 農林水産業者からは、気候変動や里山との繋がりの希薄化、担い手不足などにより様々な影響が出てきているが、適応策を通じて、食文化や産業をできる限り守って欲しいという思いも感じられた。
- 企業からは、行政、企業、地域の間で日頃から情報共有を進めていくことが重要との意見があった。

## (2) 収集した情報の確認

### 気象・生活の変化（降雪）

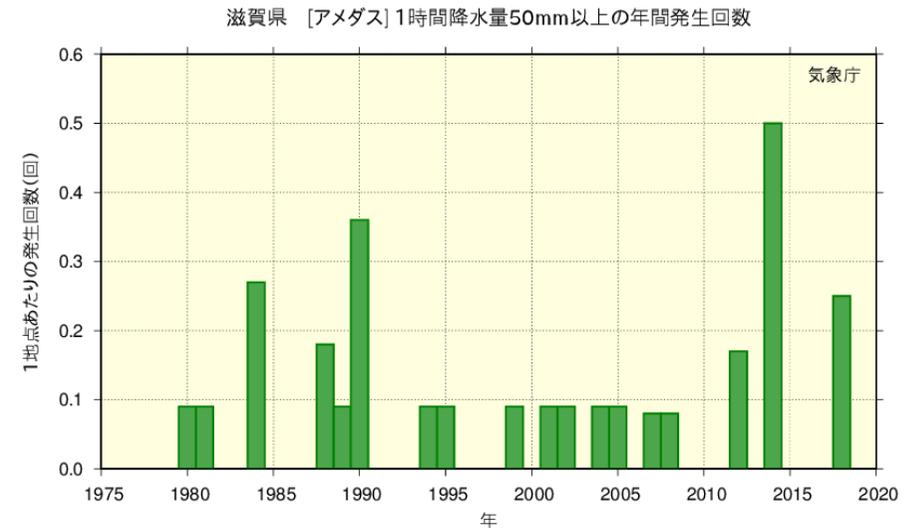
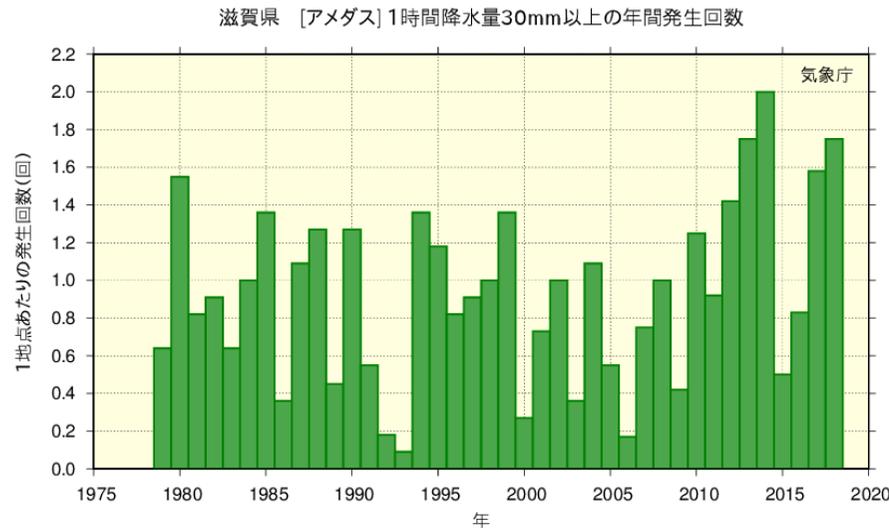
- 意見として最も多かったのは「降雪量の減少」に関しては、10年で約13cmの割合で減少。
- 福井県境の長浜市柳ヶ瀬（我が国最南端の特別豪雪地帯）でも3cm以上の降雪が観測される日数は10年で約8日の割合で減少しており、市街地の長浜市木之本でもスタッドレスタイヤを使用しない日数は増えていると思われる。



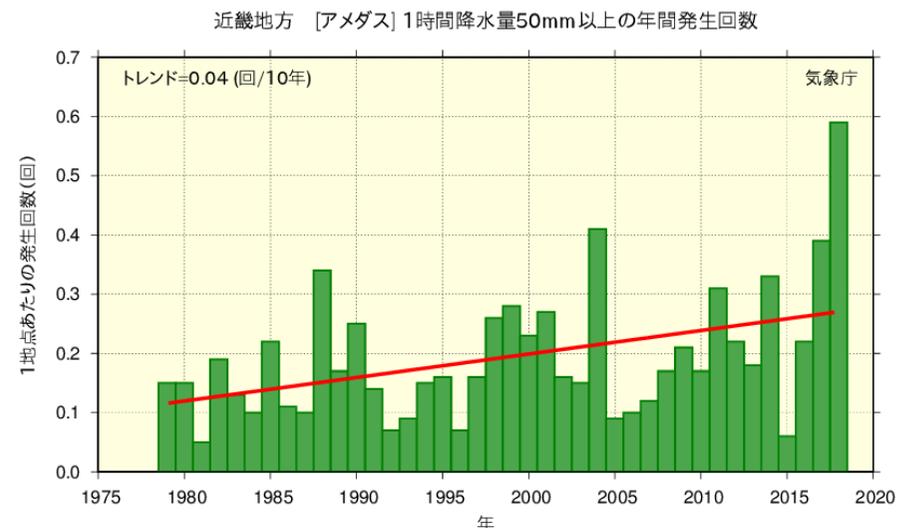
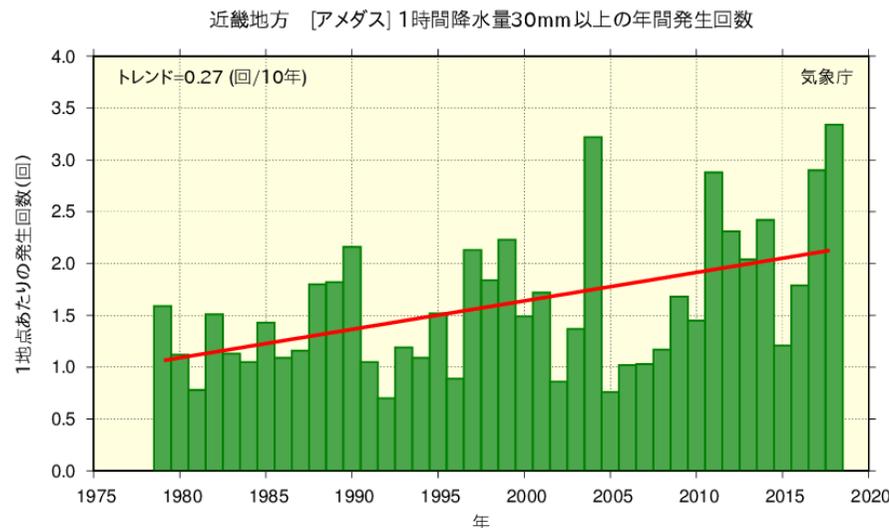
## (2) 収集した情報の確認

### 気象・生活の変化（降雨）

- 県内での局地的豪雨（1時間降水量30mm、50mm以上）の年間発生回数は統計的な有意増加は確認されなかった。一方で、1時間降水量30mm以上の雨に関しては、最初の10年と比較すると直近の10年は統計的に有意に増加している。



《参考》 近畿地方全体での年間発生回数は、それぞれ1.7倍、1.8倍に有意に増加。

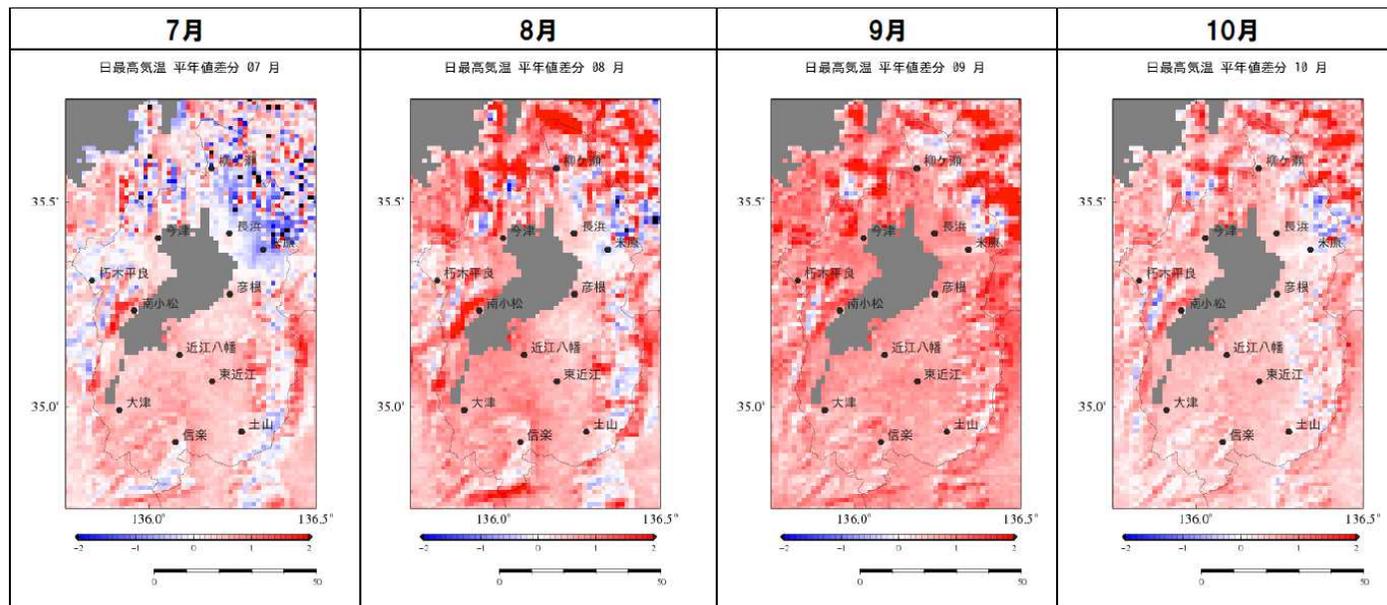


## (2) 収集した情報の確認

### 気象・生活の変化（気温）

- 滋賀県（彦根）の気温は、1984年から2018年の統計期間で100年あたり約1.35℃上昇。
- メッシュ気候値（国土地理院）の差分から1970年代と2000年代の最高気温変化を1kmメッシュ単位でプロットしたところ、8月～10月にかけて全県的に最高気温は高くなっている。
- 農林水産業従事者から夏場の作業環境が厳しくなったという指摘のとおりの結果であった。

図 メッシュ気候値差分による最高気温の変化（1970年代→2000年代）



## (2) 収集した情報の確認

### 森林・林業

- 林業者の指摘の通り、ニホンジカの被害は平成12年頃から急増し、スギ・ヒノキでは皮はぎ被害、広葉樹でも下層植生の衰退が生じている。
- ナラ枯れ被害は福井県境付近で昭和55年前後から発生しており、近年減少傾向であるが、森林の下層植生が衰退することで、生物多様性への影響や土砂の流出などが懸念される状況となっている。
- 手つかずで管理が行き届かなくなった森林が増加しており、台風接近時には、風倒木等も発生している。

		実績値				
		H26年度末	H27年度末	H28年度末	H29年度末	H30年度末
ニホンジカによる森林被害面積	ha	245	211	190	192	143
ナラ枯れ被害面積	ha	7.9	4.9	1.5	0.6	0.8
除間伐を必要とする人工林に対する整備割合	%	56	64	64	60	63
県産材の素材生産量	m	56,000	54,000	76,000	88,000	76,000



台風による風倒木の発生  
(甲賀市内、H30年)



ニホンジカによる皮はぎ被害

表 森林保全状況等の推移

#### 【有識者意見】

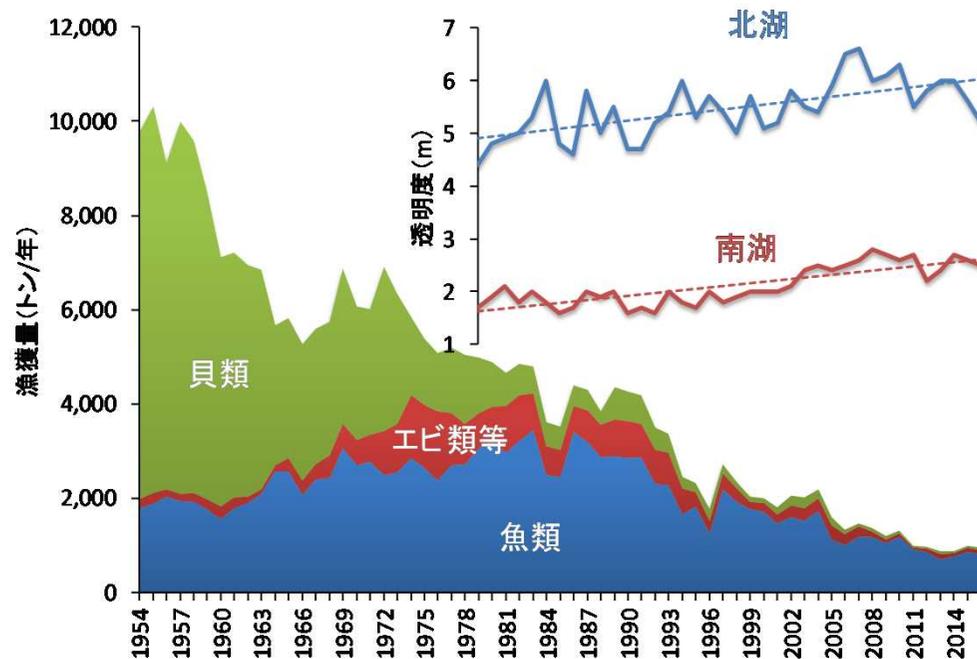
- ・ 気候変動によって起きていること、人の手が入らなくなったことで起きていること、暮らしの変化によって起きていること等、様々な原因が考えられるが、これまで滋賀県が進めてきた再造林や間伐等の取組が、保水力を維持し自然災害を防ぐ適応策としても機能している。
- ・ 引き続き、一次産業のアウトプットをいかにして維持していくかという視点が、適応策としても重要ではないか。

## (2) 収集した情報の確認

### 琵琶湖・漁業

- 流入負荷の減少により、琵琶湖や河川の水質は改善傾向が見られるものの、在来魚介類の減少など生態系の課題が顕在化している。その原因の1つとして、外来種の増加や生息環境の悪化などの直接的な影響のほか、気候変動も含めた様々な環境の変化により、栄養塩バランスやプランクトン種組成の変化といった琵琶湖の生態系バランスの変化が食物連鎖を通じて生き物に影響を与えている可能性等も指摘をされているが、明らかとはなっていない。
- 琵琶湖の水温（北湖年平均）は40年間で約1℃上昇しているが、アユ、ビワマス、セタシジミなど主要魚種について、資源や漁獲、産卵状況と水温を解析したところでは、温暖化の影響が直接これらの魚類に影響を与えていると考えられる事象は起こっていない。
- 一方、晩秋におけるアオコの発生や北湖の一部水域において観測史上はじめて全層循環が確認されなかったなど、気候変動により生じたと思われる現象が顕在化してきている。

図 琵琶湖の漁獲量と透明度

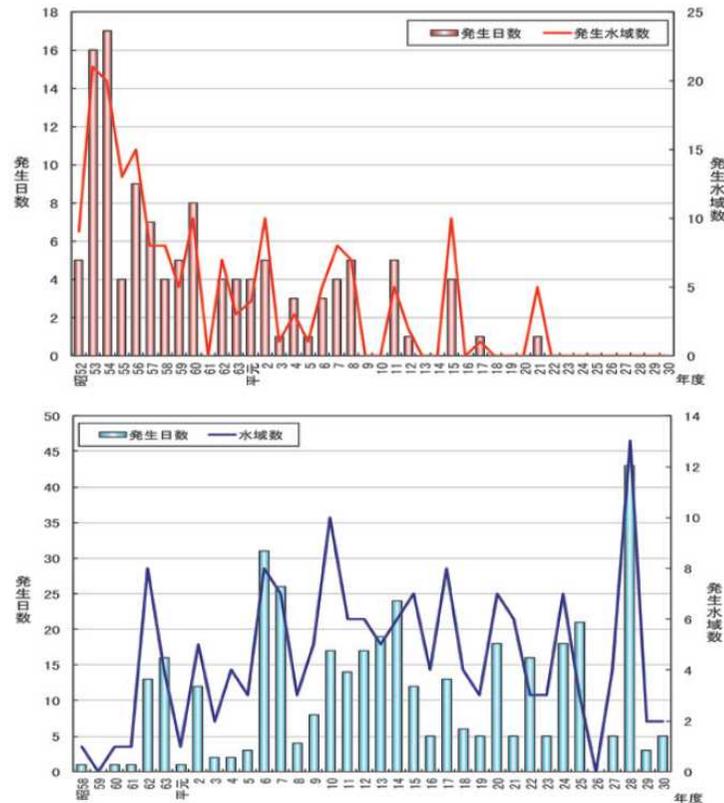


- (上) 晩秋に発生したアオコ
- (下) 大量繁殖した水草の除去

## (2) 収集した情報の確認

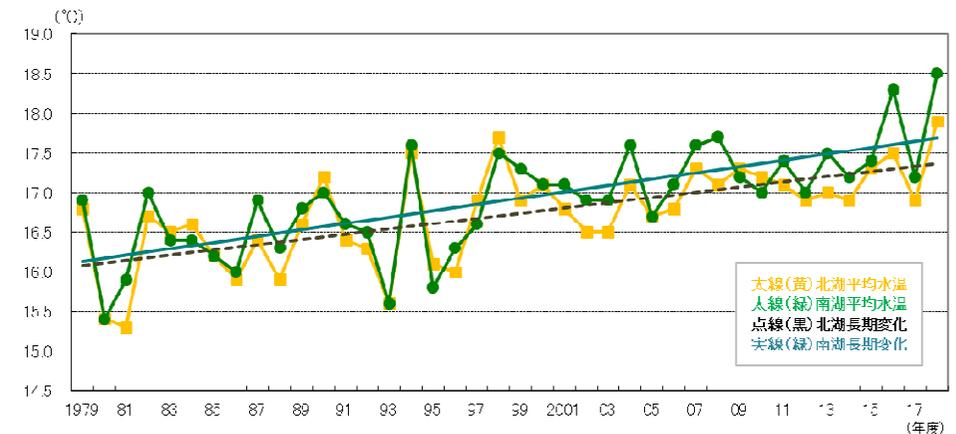
### 琵琶湖・漁業

図 琵琶湖の淡水赤潮（上）・アオコ（下）  
発生日数および水域数の経年変化



図出典  
滋賀の環境2019

図 琵琶湖の水温の経年変化（表層年平均）



#### 【有識者意見】

- 琵琶湖の場合、気候変動の影響はまだ顕在化していないが、今後、影響を把握し評価するため、モニタリングを継続していくこと、新たなモニタリング手法を確立していくことが極めて重要。
- 琵琶湖の水環境や水質メカニズムに関してはまだまだ未知のことが多く、県のみならず、国環研、大学など幅広い研究機関が、引き続き、研究を充実させていく必要がある。
- その後、対策に関しては、もしも物理的な手法を用いるのであれば、生態系に人間が手を加えることが本当に適切かも踏まえ、慎重に判断していかなければならない。
- 適応策は、琵琶湖の豊かな生態系や漁業や食文化等の価値をいかにして守るかという視点が重要。

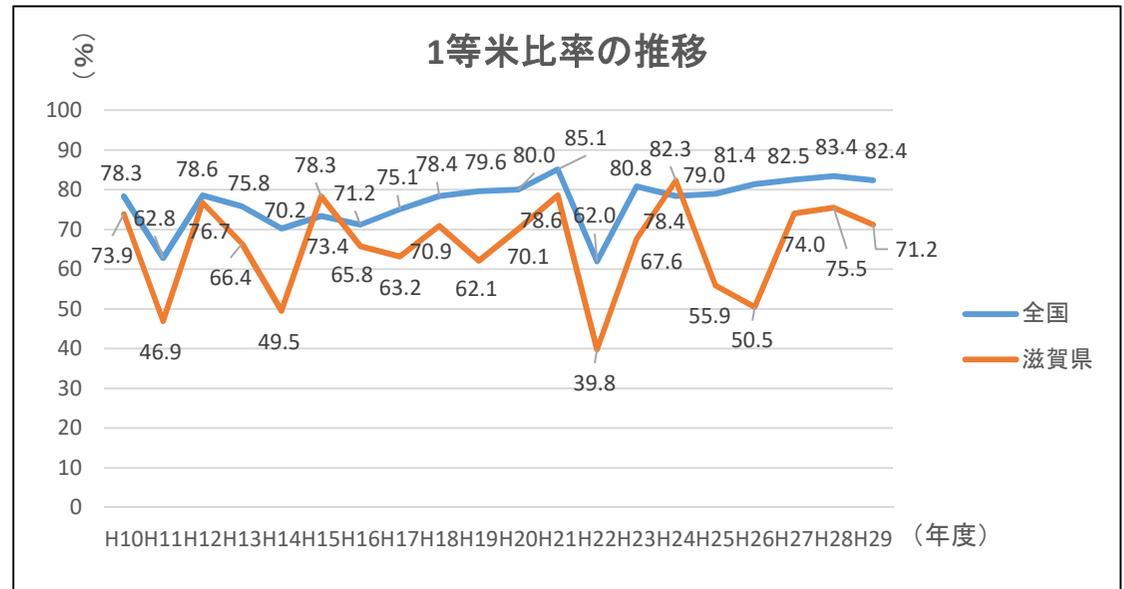
## (2) 収集した情報の確認

### 農業

- 近年の気候変動影響としては、登熟期の気温上昇により、特に「コシヒカリ」「キヌヒカリ」の早生品種において、白未熟粒や胴割米の発生による外観品質の低下が目立っている。
- 麦類は、米の生産調整を進めるうえでの中心的な作物で、団地化などの農地利用によって生産が行われているが、近年では暖冬によって生育が前進することで、凍霜害や雪害に遭遇するケースが見られる。
- 大豆は国産の需要の高まりに合わせ、水田の高度利用の面から、麦類の跡作として生産が行われているが、近年では集中豪雨による発芽不良や開花期以降の高温による成熟不整合（青立ち）による減収が見られる。
- 水田露地では、キャベツ、はくさい、かぶ類など、ビニールハウス等の施設では、ほうれんそう、いちご、トマト、メロンなどが栽培されている。作物によっては、高温等による減収や品質低下が生じている。

#### 【有識者意見】

- 滋賀県は水田が多いので、雪の減少による春先の用水減少というのは重大な問題。今後、気候変動影響を評価するときは用水のところまでしっかりと評価していかなければいけない。
- 耕作放棄地の増加は洪水被害軽減の観点からも問題で、環境こだわり農業等環境と調和した持続可能な農業を続けてきた滋賀県の取組は適応策として機能している。



# (3) 情報発信 (シンポジウム)

令和元年度 滋賀県気候変動適応シンポジウム

## 「地球温暖化と異常気象」

—災害や異常気象から身を守るためには—

近年、豪雨や記録的な高温など、異常気象が相次いでいます。自然災害や熱中症などから身を守るために、家庭や地域などのできる「適応策」を一緒に考えましょう。

**適応策とは**  
地球温暖化により生じる影響に予め備えること

**参加費 無料**

2020年 1月31日(金)

時間 14:00~16:30 (※受付開始 13:30)  
会場 大津市民会館 小ホール (大津市島の園14-1)  
定員 100名 (事前申込制・先着順)

申込期限 1月29日(水)

申込方法は裏面をご覧ください

司会:びわ湖放送アナウンサー 森田 恵奈氏

**講演 I 「地球温暖化と異常気象」**

【講師】  
気象予報士 菊池 真以氏  
これまでの出演番組「NHKニュース7」、「おはよう関西」など

**講演 II 「気候変動リスクと適応」**

「滋賀県の気候変動と県民の関心」(東京都市大学環境学部 教授 馬場 健司氏)  
「気候変動影響と気候変動適応センター」(国立環境研究所気候変動適応センター長 向井 人史氏)  
「気候変動の農業への影響」(京都大学農学研究科 教授 白岩 立彦氏)  
「気候変動と災害リスク」(京都大学防災研究所 教授 中北 英一氏)

**パネルディスカッション 「家庭・地域・行政に求められる適応策を考える」**  
—滋賀県気候変動適応推進懇話会公開意見交換会—

【コーディネーター】  
滋賀県立大学 名誉教授 仁通 孝昭氏

【パネリスト】  
国立環境研究所気候変動適応センター長 向井 人史氏  
京都大学農学研究科教授 白岩 立彦氏  
京都大学防災研究所教授 中北 英一氏  
京大大学生態学センター長 中野 伸一氏  
滋賀大学経済学部教授 田中 勝也氏  
立命館大学食マネジメント学部教授 吉積 巳義氏  
東京都市大学環境学部教授 馬場 健司氏  
滋賀県琵琶湖環境科学研究センター研究員 河瀬 玲奈氏

【ゲストパネリスト】  
気象予報士 菊池 真以氏

お問い合わせ先: 滋賀県琵琶湖環境部温暖化対策課

○ 参加者 88名

○ アンケート回答 67名

【出席者】

(お住まい)

県内 56名 県外 10名 不明 1名

(年代)

29歳以下 7名 30~49歳 16名

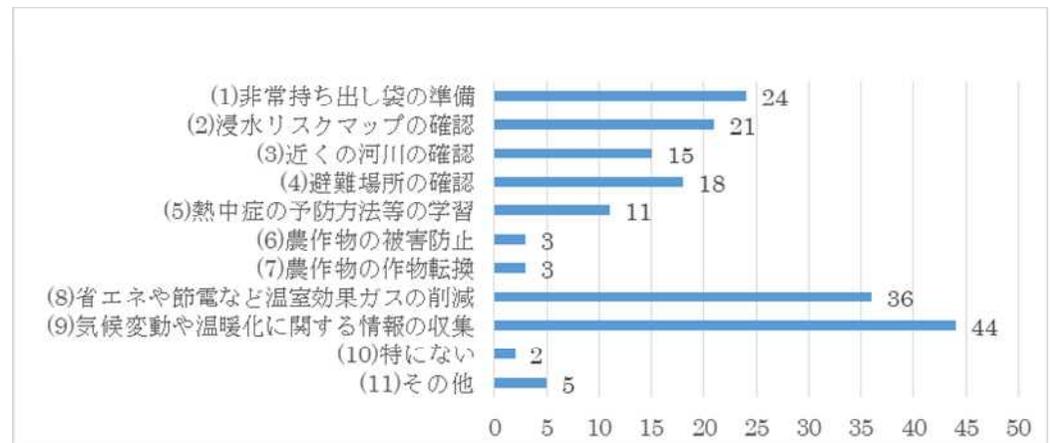
50~69歳 23名 70歳以上 20名

不明 1名



【参加者の意識の変化】

Q 本日の話を聞いて、気候変動に適応するためにどのような行動を取ろうと思いましたか (複数選択式)



(11) その他 として出た意見

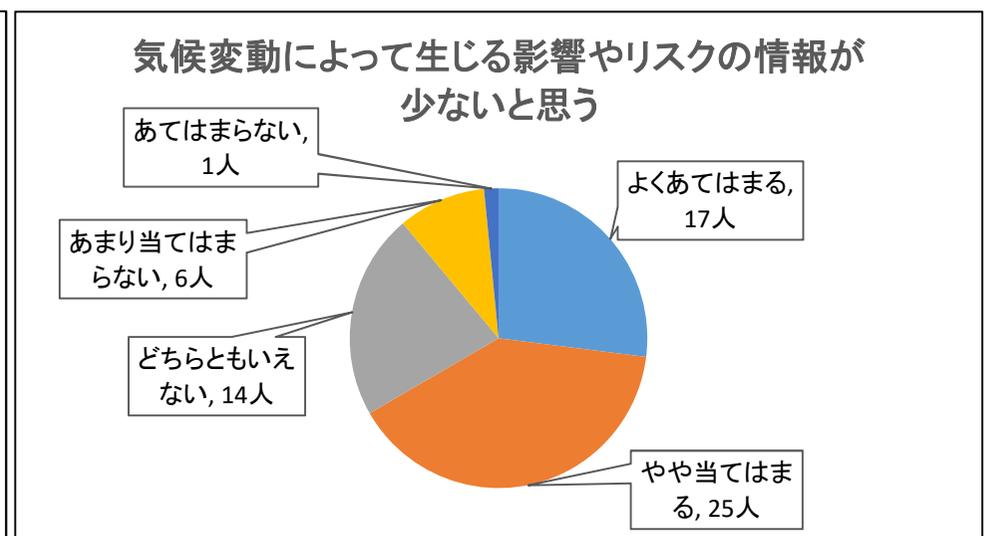
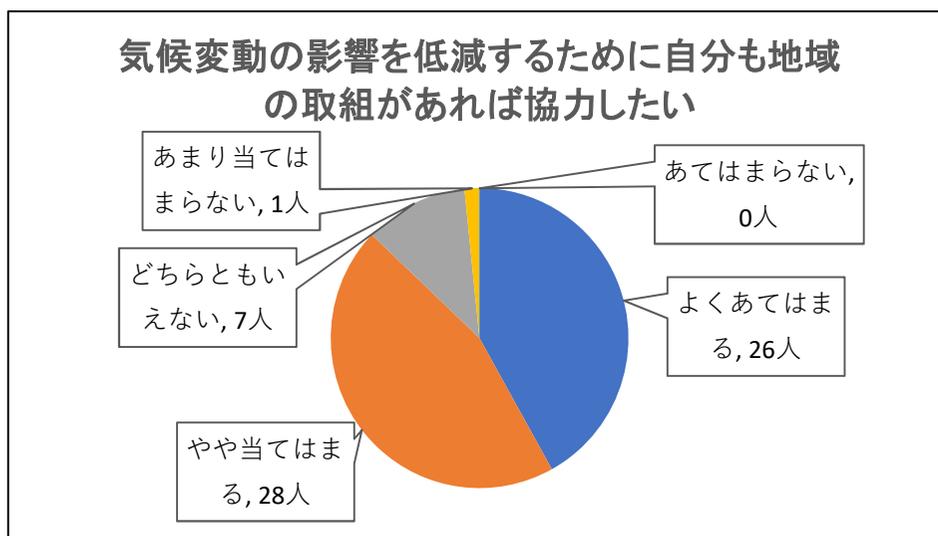
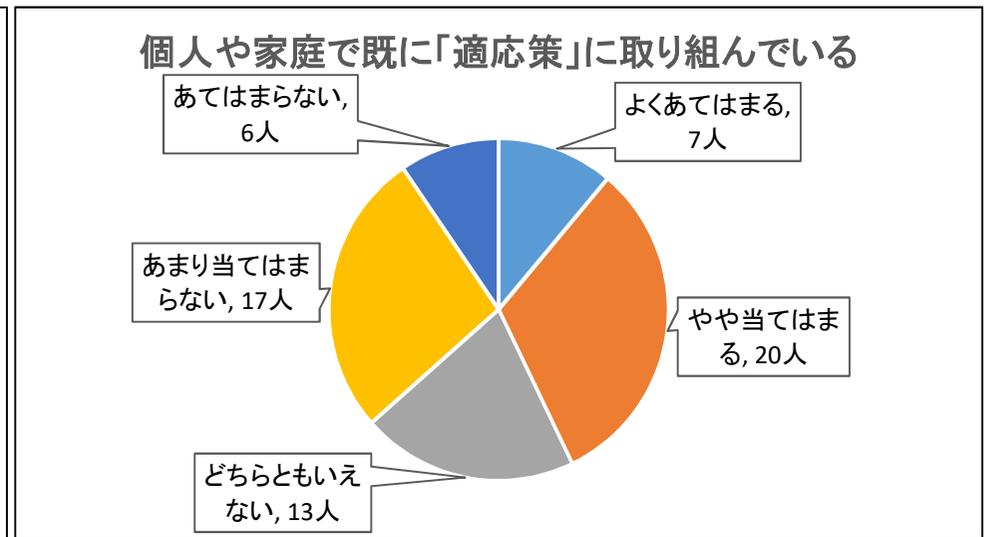
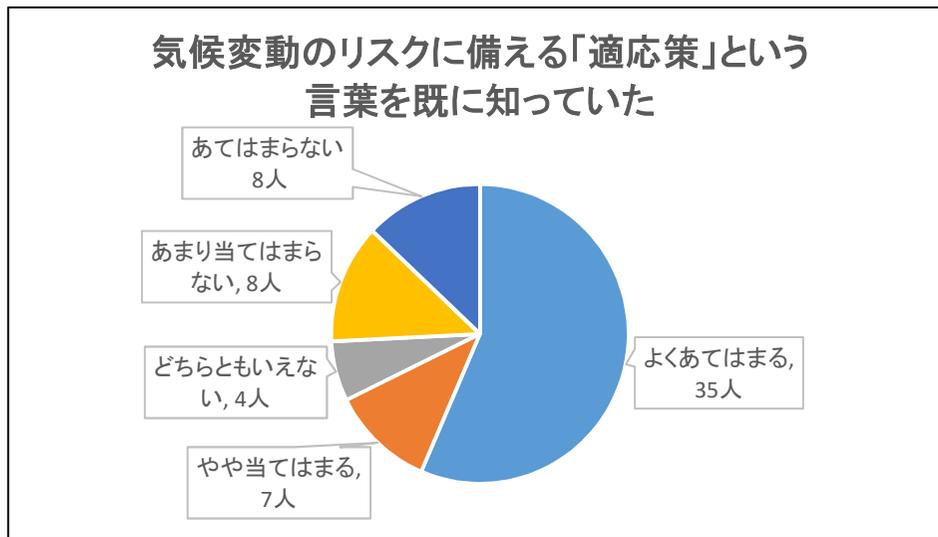
(人)

- ・個人では限界があるので自治会や行政との強い絆作りが必要
- ・地域とのお付き合いの強化が必要。

# (3) 情報発信 (シンポジウム)

## 参加者の意識の変化 (アンケート結果より)

平成27年に県政モニター (398人・回収率90.2%) を対象に実施したアンケートでは、「適応策」という言葉を知っていた方の割合は約21%。今回のシンポジウムでのアンケートでは、約6割が知っていたと回答。既に取り組んでいると回答された方も約4割に上った。情報が少ないという意見も約6割に上ったが、地域の取組に協力したいという意見は約8割を占めた。今後は、シンポジウム参加者のように特に関心が高い方等を中心として地域全体での取組を促していけるような啓発を実施していく方針。

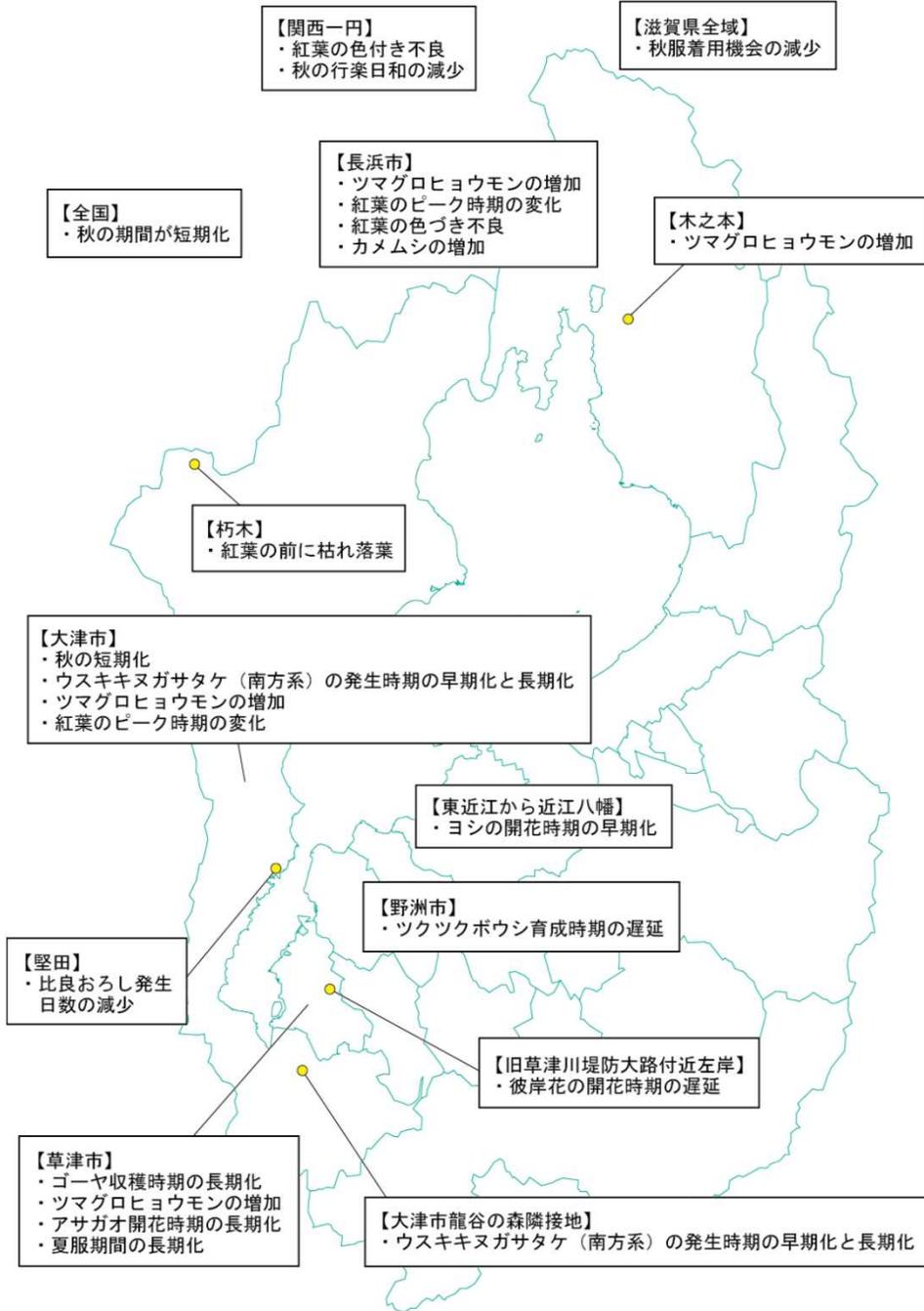






# 滋賀県の温暖化影響（季節別）

## 【秋】



## 【冬】

